名古屋大学東洋史研究報告　四十六号　二〇二二年三月発行

訳注

中国近代史学論文選訳注（続二）

―唐才常「史学論略」等二篇―

岸付潘鹿高王土
島　屋
史雨揚梨箸天
菜童波奈遠驕洋

はじめに

中国における「新史学」は往々にして梁啓超がその開山とされる。しかし、彼に先んじて新たな歴史学の構築に力を注いだ人物として忘れることのできないのが唐才常である。彼は、梁啓超とは異なり、「民族」や「国民」の歴史に跼蹐しない、いわば世界主義的な歴史学を唱えた人物であった。日本人との関わりもまた深かった。

唐才常（一八六七―一九〇〇年）、湖南省瀏陽県生まれ。年少から読書を好み、譚嗣同と共に欧陽中鵠に師事。一八八六年童試に及第、長沙の嶽麓書院、両湖書院等に学び、のち学政江標によって拔貢生に挙げられた。日清戦後、変法を志し、巡撫陳宝箴の庇護のもと、九六年より熊希齢、譚嗣同らと時務学堂、南学会の設立を行い、『湘学報』や『湘報』の発行に尽力した。九八年の戊戌政変によって六君

子が処刑され、康有為、梁啓超が日本に逃れると、発憤して渡日。日本で康、梁、孫文等と会見し、やがて康、梁から資金を得て、自立軍蜂起を志した。九九年、上海租界に正気会、後の自立会を組織。正気会章程の序文には、「我が種族でなければ、その心は必ず異なる」、「君臣の義はどうして廃することができようか」という矛盾した言葉があり、革命派から批判された。一九〇〇年、上海の愚園に中国国会を開き、会長容閎、副会長厳復、総幹事唐才常の下、中国の保全、文明進化、外国との和平、義和団の鎮圧、光緒帝復辟、載漪・剛毅の否認等を掲げた。唐才常は自立会と国会を合わせ、東京高等大同学校の留学生の参加も得て蜂起を画策。漢口の英国租界に自立軍を組織し、また会党とも連携したが、資金到着の遅れや計画の漏洩によって、同年八月、張之洞の官憲に逮捕され、二〇余名の仲間とともに処刑された。[1]

本稿は、唐才常が一八九七年四月から『湘学報』（第二〇期までは『湘学新報』）誌上に、「史学」という項目の下、連載した一連の論文の中から、その第一篇「史学論略」を取り上げ、訳注を施して、紹介するものである。[2] 変法運動の一つの震源地となった湖南で発刊された『湘学報』は、『時務報』等と並ぶ変法派の代表的機関誌であった。[3] ここで論じられた歴史論とはいかなるものであったのか。その一斑を窺いたい。また本稿は、こののち一八九九年一一月に唐才常が『亜東時報』第一七号誌上で日本との提携について論じた「日人実心保華論」についても、訳注を施し、紹介するものである。『亜東時報』は日清貿易研究所出身の実業家白岩龍平の援助を得た乙未会（のち東亜同文会）が創刊、漢詩文家山根立庵が編輯を担った雑誌で、唐才常をはじめ、章炳麟、畢永年、宋恕といった中国側人士もここに集った。[4] 果たして唐は日本といかなる関係を結び、いかなる日本論を展開したのか。その一端を探りたい。

第一章に示す「史学論略」は、のちに訳出する通り、いわば中西古今の歴史学のすすめである。一見したところ、中西の歴史書を羅列するだけのようにも映るこの史論の主眼は奈辺にあったのか。それは、すなわち、中西の歴史を調和させ、変法によって進化を遂げることで、大同の世の実現を見通す、世界主義的歴史観の提示にあった、と見てよいだろう。唐は康有為の直接の弟子ではなかったが、康に私淑し、康が唱えた孔子が布衣の身でありながら『春秋』を著し、古に託して制度を改め、世界を拠乱世から升平世、さらに太平世へと導こうとしたとする「素王改制」、「大同三世」の説に

共鳴していた。[5] この「史学論略」の所論も、こうした「素王改制」説が基調となっている。

もっとも、唐才常の所論で康有為以上に際立つのは、徹底して中学を西学に付会し、両者を対等に扱う点である。なかでも顕著な例が、『春秋』の『万国公法』への付会である。[6] 唐は「地球」上に国たる以上、「夏をもって夷を変ず」という態度はもはや通用しないとして、『万国公法』に基づく世界秩序を敢然と受け入れたのである。[7] いわく、『万国公法』にせよ『春秋』にせよ、「文明」と「野蛮」、「華」と「夷」の対立を孕みつつも、「乱を撥(おさ)め、正に反(かえ)す」（孔子が『春秋』を著した目的として述べた語）ことが本旨であり、両者は「全球の公理」であるとして、[8] これによる太平世の実現を目指したのであった。

このような唐才常の歴史観については、これまで、それが牽強付会で、徹底性に欠ける、との指摘があった。[9] つまり、革命史の登場以降、その西洋に対する融和的な姿勢が、帝国主義への妥協であるとして、批判を招いたのであろう。しかし、唐が諸外国に対する不遜な対応や賄賂の無心こそがむしろ各国の蔑視と攻撃を招いたとして、『万国公法』すなわち『春秋』の遵守を求め、[10] 狭隘な排外主義や民族主義に陥ることなく、調和的な世界秩序の構築を目指して自己変革を説いたことは、今日なお振り返るに足る価値を有しているのではないか。このような思想を有していたからこそ、彼は最終的に義和団の鎮圧、ならびにこれに乗じて欧米列国に宣戦を布告し、そしてなによりも刎頸の友譚嗣同の命を奪った清朝保守派の打倒を目指して、蜂起へと向かったのであろう。

第二章に示す「日人実心保華論」は、一八九八年以降、列強による「瓜分」の危機が一層強まったのち、日本との全面的な提携を訴えたものである。ここでは、世界主義というよりも、アジア主義が唱えられた。

唐才常と日本との関わりは日清戦争時期に遡る。当初、敗戦に憤りを抑えきれなかった唐であったが、[11] 一八九五年七月にはつとに黄遵憲『日本国志』を読み、日本が「一島国」でありながら、維新後二〇年で大きく変貌したことに驚きの目を向けている。[12] 九七年以降は『湘学報』に多くの論説を発表し、随所で日本について言及している。[13] なかでも同年八月から連載した「日本安政以来大事略述」では、『日本国志』に拠りつつ、日本が夜郎自大に陥ることなく、中国や西洋に習うことを恥じなかったため、三〇年で東亜の雄国になったとし、日本の「変法」を評価した。[14] このような日本に対する関

心や評価の背後には、「吾が中国の徐福既に東しより後、之〔日本〕を啓く」、「之れを総ぶるに、日本土人、我と同種なり」と述べられる通り、日本に対する特別な親近感があったであろう。[15]

さらに、こののちロシア、ドイツの租借地獲得等によって「瓜分」の危機が高まると、唐は日本との直接の提携を唱えるにいたる。すなわち、九八年四月に『湘報』に発表した「論中国宜与英日聯盟」では、九七年末の神尾光臣、梶川重太郎、宇都宮太郎の湖南訪問を受けて、「今、日人既に我に聯盟するを願い、且つ密に中、英を聯ねて相い椅角となすを願い、且つ性命死生をば相い扶持するを願わば、千載一遇、何の幸いか之れに如かん、何の快か之れに如かん」と大いに賛意を示し、留学生の派遣等を通じてまず「学」を通じることを説いた。[16] また、同年五月に同じ『湘報』誌上に発表した「論興亜議会」では、横浜大同学校の校長徐勤から日本で興亜義会が設立されたことを知ると、湖南でも分会を設立することを建議した。[17] そして、こののち戊戌政変がおこり、日本への渡航を経て、[18] 帰国後、上海で再び健筆を揮ったのが『亜東時報』である。

この頃から翌年の自立軍蜂起に赴くまでの一年余りの間に、唐は本稿で紹介する「日人実心保華論」の他、七篇の文章をこの『亜東時報』に発表している。なかでも目を引くのが、当時『訳書公会報』等の日本語翻訳者として上海にあった安藤虎雄（虎男とも、号は陽州）の北京行を送った「送安藤陽州君入燕都序」である。[19] ここで唐は、「甲午の戦事は則ち以て亜東文明の漸を啓」いた、として日清戦争を再評価しつつ、さらに「自頃以来、余の見る所の東人の奔走喘汗し、乃の心中国にある者〔中国に心を寄せるもの〕、百十人〔およそ百人〕を下らず」と述べ、「中国を視ること其の国の如き安藤および日本の志士に対し、「独り国界有るを知らざるのみに非ず、即い形骸〔容貌〕の界も且つ之を忘る」との思いを吐露するのである。[20] かくして、こののち田野橘次や井上雅二といった日本の志士とともに、唐は自立軍蜂起へと赴くのであった。[21] 最後、彼が処刑に臨んで述べた言葉は、「中国時事日び壊るるに因り、故に日本覆幕の挙動に效い、以て皇上を保ちて復権せしめんとす。今既に敗露〔発覚〕すれば、死有るのみ」であったという。[22]

なお、本訳注の「はじめに」は土屋が執筆し、第一章は岸、鹿島、付が、第二章は高、潘が執筆し、土屋と王が加筆修正を施した。また、凡例的なこととして、①底本は第一、

二章のいずれも中華書局編集部編『唐才常集（増訂本）』（中華書局、二〇一三年）所収本を用い、第一章については『湘学報』ならびに唐の文集である『覚顛冥斎内言』（一八九八年）所収本を、第二章については『亜東時報』所収本を、適宜、参照した。この他、陳善偉『唐才常年譜長編』上下冊（中文大学出版社、一九九〇年）も、随時、参照した。②紙幅の関係から原文を掲げえなかったが、重要と思われる箇所については訳注で示した。③原文中の割注は（　）内に示し、訳者による注記は〔　〕内に記した。④人物の略歴等について、歴史事典類など一般的な工具書に拠ったものは、逐一出典を示さなかった。

注

（1）深澤秀男「唐才常」（近代中国人名辞典修訂版編集委員会編『近代中国人名辞典（修訂版）』、霞山会、二〇一八年）、五五九頁より抜粋、一部改。従来、唐才常は、その自立軍蜂起が改革から革命に向かう過渡的な位置にあったと論じられてきた。近年は、それが日中聯盟論と会党との関係から論じられている。藤谷浩悦『戊戌政変の衝撃と日本―日中聯盟論の模索と展開―』（研文出版、二〇一五年）、五八七―六五一頁。

（2）もともと『湘学報』誌上では「史学第一」と称されていたが、翌年、彼の文集『覚顛冥斎内言』（一八九八年）に収録される際、一部改刪されるとともに、「史学論略」に改められた。なお、「史学第二」以降は「史学第五」まで連載され、それぞれの副題は「論最古各国政学興衰之理」、「論各国変通政教之有無公理」、「日本安政以来大事略述」、「各国種類考」である。

（3）ただし、『湘学報』は『時務報』より学術性が強かったという。八百谷晃義「《湘学報》的経営、流通以及其在維新運動上的位置」（『新史学』三〇巻一期、二〇一九年）は、この点を含め、維新運動中における『湘学報』の位置づけに詳しい。

（4）戴海斌「山根立庵、乙未会与『亜東時報』」（『復旦学報（社会科学版）』五九巻三号、二〇一七年）参照。

（5）一八九六年、唐才常は、北京で梁啓超から康有為の説を聞き、「はじめて生面が開けた」という譚嗣同から、間接的に康の説を聞いている。「致唐才常二」（蔡尚思・方行編『譚嗣同全集（増訂本）』、中華書局、一九八一年）、五二八―五三〇頁。また、光緒二三年（一八九七年）六、七月には『新学偽経考』を、翌二四年三月には『孔子改制考』、『春秋董氏学』を初めて読み、すぐには同意できないところもあったが、やがて康有為を拝服すること「五体投地」にいたったという。「上欧陽中鵠書（九）」（中華書局編集部編『唐才常集（増訂本）』、中華書局、二〇一三年、以下『唐才常集』）、五三一―五三三頁。

（6）例えば、「公法者、万国之『春秋』也」、「吾素王以『春秋』為公法」等と見える。「公法通義」（『唐才常集』）、九六頁、「公法学会叙」（同前）、二八八頁。

（7）「交渉甄微」（『唐才常集』）、七一―七五頁。

（8）前掲「公法学会叙」、二八八頁。

（9）朱仲玉「試論唐才常的歴史観」（『史学月刊』六期、一九八三年）。近年は、唐才常の蜂起を各勢力による複雑な全体像のな

かに位置付ける労作も現れている。桑兵『庚子勤王与晩清政局』（北京大学出版社、二〇〇四年）。

(10) 例えば、次のような記述を参照。地方官の西洋人に対する刻薄な扱いが、中西間の交通を隔て、最終的に西洋の攻撃を招いたとして、数々の事例を列挙する。「中国奚以至今隔膜也。曰、中国受病之源、難更僕終〔数えきれないほど多い〕也。中国従前之疆吏、以謂漢於匈奴、天上也。蜀於南人、天威也。張皇紕繆、苛索抑勒、上欺朝廷、下愚土庶、以貽憂於今日也。〔中略〕今之条約章程、屏中国於友邦外、凡有人心、罔不眥裂。而不知我之屏西人於異類之時、其為西人痛恨者、弥歴年歳也。方明之季也、英人抵虎門、欲通商締和、華人納葡人言、設大砲轟英人、英亦然、砲相向、縦擊二時、焚衙署、截商船、始狠狽許英貿易。此以商搆釁、蒙昧受讒之嚆矢也。〔中略〕西人習知中国大吏、惟以兵脅、始俯首帖耳、就其圈苙〔オリの中に入る（おとなしくなる）〕。於是毎一興師、増一利益、一国霑利、諸国尾之、遂挙中国前此疆吏之抑勒其人者、抑勒中国而不止」。「通塞塞通論」（『唐才常集』）、八〇―八四頁。

(11) 例えば、「現在李中堂〔李鴻章〕与倭人所議和款、太覚不堪」、「和議已成、所約条款、非是和倭、直是降倭。奸臣売国、古今所無」と見える。「致唐次丞書（二）」（『唐才常集』）、五四一頁、「上父書（二十六）」（『唐才常集』）、五一四頁。

(12) 「上欧陽中鵠書（三）」（『唐才常集』）、五一九―五二二頁。

(13) 例えば、日清戦争は事故のようなもので、日本への復讐を考えるのではなく、むしろ民智を開き、国を富ますことに努めなければならない、といった主張が注目される。「両瞽相遇、而仇道不休、両瘖相持、而色然以怒。吾見排解者之援以為功、而所喪滋多矣。故英、俄、法、徳、日本、倶当開誠布公、与之交際。而吾之所争者、祇在智其民、強其学、富其本、不在挾忿尋仇之挙也」。「外交論」（『唐才常集』）、七六―七九頁。

(14) 「日本寛永以来大事述」（『唐才常集』）、二三三一頁。『覚顛冥斎内言』に収録される際、題名が改められた。

(15) 「史学第五 各国種類考」（『湘学報』一五―二七号、一八九七―一八九八年）、いま陳善偉『唐才常年譜長編』上冊（中文大学出版社、一九九〇年）、三五六頁。ただし、唐才常は、最終的には「通種」による「太平」の実現を構想していた。「通種説」（『唐才常集』）、一〇〇頁。

(16) 『唐才常集』、二七五―二八〇頁。

(17) 『唐才常集』、二八一―二八三頁。

(18) 日本では亡命していた梁啓超とその後を追った時務学堂の学生らとしばしば往来し、「ともに革命を図った」という。梁啓超『清代学術概論』（いま小野和子訳、平凡社、一九七四年）、二七一頁。

(19) 安藤については、于暁琳「安藤虎雄与《訳書公会報・東報彙訳》」（『文化交渉』七号、二〇一七年）参照。

(20) 『唐才常集』、三九七―三九八頁。

(21) 田野橘次『最近支那革命運動』（新智社、一九〇三年、のち桑兵主編『辛亥革命稀見文獻彙編』四三冊、國家圖書館出版社等、二〇一一年）、近藤邦康「「井上雅二日記」―唐才常自立軍蜂起―」（『国家学会雑誌』九八巻一・二号、一九八五年）等参照。

(22) 馮自由『革命逸史』六集（中華書局、一九八一年）、二七頁。

一、史学論略

儒者たちは五千年前後の歴史をもって、万民のこれまでの

働きが明敏であったか遅鈍であったかの性質を映し出すのである。[1] 三代から始まり明に至るまで、彼らは持論を改めることなく、上のものの通りに行って、下のものはこれに倣い、年長者のやり方を踏襲して、年少者はこれに従った。まさにこの時になって、中国[2]の儒者は見聞が閉ざされてしまった。漢、唐の史書の記すところはパミール高原以西の地勢や国名にたいへん詳しかったが、風俗や教化のありようについては記述が欠如していた。元代はほぼ全アジアがその治下に収められたが、中原に入るに及び、勢力は大きかったものの力の及ばない所があった。[3] 当時、知識人がインドやペルシャ、トルコのことを熱心に研究し、政治、風俗の興廃の歴史を考察したということはついぞ聞いたことがない。本朝においては大きく版図を広げ、皇帝の権威の及ぶ所はみな畏怖して服従したが、三百年の時を経て時勢はだんだんと行きづまってしまった。『易』に「窮すれば則ち変じ、変ずれば則ち通ず」とあるが、[4] 中国の「通」は劇烈というべきである。こうして変わることなく、死んでも変わらないのである。たとえ変わろうとしても、民は官にあれこれ文句をつけ、士は国を責めるばかりで、大勢の儒者を集めて「三通」や「二十四史」の名称をたずねてみても、[5] それぞれの書名を挙げられる者すら多くない。これでどうして全世界を論ずることができようか。これらの人々は、水に溺れて助けを求めているのに先に衣も解かず、井戸に落ちた人に石を投げつけて狼の心を満たしているようなものである。[6] まず彼らに古今の中国と外国の状況を見通すことのないままその奮起を望んでも、それは「韶濩（しょうご）」を無知な人々に奏でるようなものであり、[7] うまくいかないのも無理はない。荀子は、「聖王の事跡を見たいのあれば、その明白なものについて見るべきで、後王こそがそれである」と言った。[8] また謝秋水[9]は、「学問というのはものごとの道理を経によって明らかにし、事柄を史によって習うのである。史が学問のなかで六割を占め、〔歴史を読むことで〕経験・鍛錬を積むことがその四割を占める」と言った。[10] このゆえに、中国の歴史に通じていなければ、秦、漢以来の政治や学術において、どれが本流でどれが傍流か、それらが千変万化して行き着くところがないこと、また制度や法令、礼楽で明らかにそのきまりを変えてしまったものが、なお先例から外れてしまっていることが分からないのである。[11] また、西洋の歴史に通じていなければ、ヨーロッパで数百年前は、貴族が権力を握り、民はその習慣に慣れきって、知識人は空論を述べ（例えば、西暦一二七八年、イギリス人は科学者が妖

術を使うと無実の罪を着せていた[12]、中国で長年続いてきた習慣にたいへん近かったが[13]、ただ彼らは変われば変わるほど実りがあり、中国はいくら変わっても中身が伴わないことが分からないのである。中国と西洋の歴史を合わせて考えてみると、日々帝王の心中に変化があるのをあやしむ者は、頭が固い小人然として、変えないということをいつも口にしているようである[14]。こうして、ロシアのピョートル大帝、フランスのナポレオン、アメリカのワシントンの事績について、まったく夢にも見たことのないような者たちが、ことあるごとに彼らは旧態依然であると言うのであって、それでどうしていわゆる百年来の新政がありえようか。昔、耶律徳光が〔後〕晋の家来に言ったことには、「中国のことについては、私はみな知っている。わが国のことについて、お前たちは知らないだろう」と[15]。いったい遼と今日の西洋とを比べると、そのどちらがより賢明で、どちらがより巧みであるのか。それでいてなおこのようであってよいのか。そうであるならば、わが中国四億人にこれまでヨーロッパ・アジア各国の治乱興亡の由来について通暁するものがいなくて、それでよいのだろうか。

古くは六経みな史であった[16]。『尚書』は左史が掌り、『春秋』は右史が掌り、これが長く続いた[17]。『易』は卜筮（ぼくぜい）の史であり、『詩』は列国の得失の跡を述べ[18]、『礼』『楽』も史官が制定したもので[19]、経と史とは互いに表裏していた。〔『春秋』が書かれ〕周の文飾を変えて殷の質朴に従うようになると[20]、楚の『書』、晋の『乗』もそれぞれ一家を成した[21]。そこで司馬遷、班固が正史を編纂し、荀悦、袁宏が紀事の書を編纂し[22]、司馬光『資治通鑑』が編年体の史書として編纂された[23]。兵、刑、譜系が別々に分かれ[24]、詔令、奏議が一つになると、あるものは地理の遺編を輯め、あるものは職官の故事を編み、あるものは『周官』六典を沿襲し[25]、あるものは劉向、劉歆の『七略』の体例を模倣した。そもそも源流を分析するには、あまねく各派のことを知るのがもとより歴史家の常とするところである。そこで志のある士は、とりわけ四民の教養のもとをたずねることに心を尽くし、歴代の礼楽兵刑の制度をひととおり研究し、これをよく実行に移すことを重要な任務とするのである。もし宋代の心の不純を責める論[26]を踏襲し、明人のみだりに批評を行う陋習[27]に従って、空論を蔓延させ、それで広く科挙の合格者をとるのであれば、状況はますます悪くなってしまう[28]。要するに、古を考えることで今を明らかにし、中国から西洋におよび、広く見ておよそのところ

を採り、時を秩序づけて役に立てる、この四者が史学の要点である。

ゆえに、歴代の正史、編年、紀伝の記録を読むことは、古の歴史に通じるためである。わが朝の『東華録』[29]、『東華続録』[30]、魏默深『聖武記』[31]などの書物を読むのは、今日の歴史に通じるためである。黄遵憲『日本国志』[32]、王韜『法国志略』[33]、慕維廉『大英国志』[34]、徐景羅『俄史輯訳』[35]、岡千仞『米利堅志』[36]、沈敦和『英法俄徳四国志略』[37]、及び日本の岡本監輔『万国史記』[38]、艾約瑟『欧洲志略』[39]、『希臘志略』[40]、『羅馬志略』[41]、英人博那『四裔編年表』[42]、王韜『普法戦紀』[43]、林楽知・瞿昂来『東方交渉記』[44]、林楽知・鄭昌棪『列国歳計政要』[45]、馬懇西・李提摩太『泰西新史攬要』[46]を読むのは、西洋の歴史に通じるためである。ただし、中国と西洋の言語が全く異なり、諸々の歴史書が多く訳述者の手を経て翻訳されているため、言葉の意味が乱れてしまうことは、本当に避けることができない。これによって初学者は多くそれが読みづらいことに苦しみ、学問に通じた人はまたそれが瑣末であることを卑しむのである。これは儒者の平静で穏やかな態度でもって、西洋の歴史の精華を中国の歴史と相互に照らし合わせながら研究するほかない。かつて考えたところでは、西洋の学問がまだない時、中国人は史学にほとんど通じていなかった（史に精通して誤りを訂正したものは決して少なくないが、秦、漢以来の治乱得失のこじれを突破できるものは、十に一、二もいない）。現在、西洋の学問の表面的なところだけをもってきて、[47]中国人はだんだんと史学を廃止しようとしている。西洋の学問がなければ史学は滅び、西洋の学問があっても史学は滅ぶ。史学が失われるのを救おうとするのであれば、はじめに古今各国の政治のあり方についてその異同をはっきりとさせて、強弱興亡の本源を知らなければならない。次に立国の源流、人種の移動を研究する。次に帝王や傑出した人物を列挙し、中西の比較を行う。次に宗教各派の良否を明らかにし、将来地球上の全世界が素王改制[48]の誠意を越えることのないことを知る。次に各国の和睦と戦争のかなめとなっていて、全体の局面に関係するものを明らかにする。次に各国の往時の先住民と中国の僮、黎、蠻、苗の各族が次第に消滅していった理由を詳らかにする。唐の太宗は「古を鏡として、得失を知るべきである」といった。[49]そこで私はこう述べる。中西の古を合わせて鏡とすれば、その効果はさらにいかほどになろうか、と。

西洋諸国が史館を設置しないのは、思うに新聞社が史館で

あるからである。およそ議会が開催される時には、君主がこれに臨み、王公大臣及び各議員も臨席し、事件の大小にかかわらず、それぞれが自分の意見を述べ、是非をはっきりとさせ、新聞社はただちにそれを記録して国内に伝え、さらには世界へと広めるのである。『礼記』には「史は筆を載せ、士は言を載す」とあるが、[50]〔新聞は〕よくこの意を伝えているのではないか。そのため、遠慮のない言論がそのまま記録されていて、中国の歴史書に比べていっそう信用に足る。ましてや、新聞の普及はたいへんなもので、レストランや喫茶店にいたっても往々にしてそれを見ることができる。〔つまり〕新聞社は一国の公有の権利であり、史学は四民が関与する事業なのである。しかも、およそ人口、国土はその大小を比較し、汽車、鉄路、電線はその長さを測り、貨物輸出入量および官制、教会、学校、経済、兵隊数など、記録してチェックしないものはない。これは中国の歴史書の表や志とおよそ同じである。考えるに、『漢書』芸文志には、小説家は稗官から出たとあり、如淳の注釈には、王者が民間の風俗を知りたいと思って、そのために稗官を設けてこれを述べさせた、という。[51]思うに、今日の新聞は異日の史料であり、政治家、科学者、法律家もみなものごとを比較検討するのがこのよう〔小説家同様〕だったのであり、一挙三得である。[52]ゆえに西洋諸国に君主の歴史もあり、また民間の歴史もあるのは、本当にこれを重視し、本当にこれを慎重に扱っているからである。

『使徳日記』[53]に拠れば、ドイツ人芍克が東方の学問に造詣が深く、訳書に満、漢、蒙三語の便覧書と『契丹国志』がある。七六歳にして、なお遼、金、元の三史を翻訳するつもりであったという。[54]また愛爾勃の娘はまだ一三歳であったが、六か国語に通暁し、中央アジア事情について語ること非常に詳しく、各国の情勢を手に取るようによく知っていたという。[55]王韜が編纂した『法国志略』は、この書がもともと日本人の岡千仞の著作から出たものだと述べている。[56]そのため、この書のなかには、重野安繹、[57]荻原裕、[58]河野通之、[59]木原元礼[60]などの議論が多く収められている。海外の男女で心を中西の歴史に留めるものが多いのはなんと甚だしいことか。中国の儒者は学齢となって書物を授けられるとすぐに寄り集まって科挙試験のための参考書を抱え、[61]名誉と利益を求め、平身低頭して、懸命に考えてばかりいる。天は暗く、山川は痛ましく、孔孟が開いた端緒はたちまちに失われてしまった。いくらか悪賢い者は、書坊の『易知録』[62]、袁了凡『綱鑑』[63]及び胡致堂、[64]邱瓊山、[65]林西仲[66]らのいいかげんで道理のない一句二句

を抜き取ってきて、それで騒がしく人々に向かって史学、史学と叫んでいる。ああ、廉恥心は一体どこにいってしまったのだろうか。ある人が言うには、それは確かにその通りだが、では西洋の歴史はひとまずおくとして、中国の歴史を読む者は一体どこから読み始めればよいのか、と。これにこたえて言うには、『春秋』というのは、素王改制に関する書物であり、しかもその三統三世の義は、永久で無数の世界に範を示すに足り、[67]これに違うことはない、と。『春秋』以外では、『史記』、『漢書』が重要である。『史記』は素王の本流を伝えており、『漢書』はすこぶる膨大である。〔『史記』の〕八書、〔『漢書』の〕十志は、古言古例が世にそびえ立ち、宏大かつ緻密な著作である。正史以外では、司馬光『資治通鑑』がいたって詳細である。その書は採録した雑史が三二二種にのぼり、完成におよそ一九年を要した。天文、地理、礼楽、暦数の内容はすこぶる該博で、治乱興亡のみを記したのではない。[68]その他は、『通典』、『通志』、『文献通考』の三書[69]に力を注ぐべきである。とりわけ『通志』が重要である。しかし、古今の事実を挙げ、その源流にまで通じようとするのであれば、『通鑑紀事本末』[70]、宋、元、明の『紀事本末』[71]もまた重要な書物である。思うに、漢代以来、史家のおよそ重要なものは、紀事と編年の二つの体例である。[72]宋の袁枢は〔『通鑑紀事本末』で〕各おのの事件の始終を詳細に記録し、これによって紀伝体史書のように一つの事件が数篇に重複して現れることを免れただけでなく、編年体史書のように一つの事件が数巻にまたがってしまうこともなくなった。[73]これは本当に中国の歴史に通じたい人にとって不可欠な書物である。西洋の歴史書の翻訳について言えば、よい本がない以上、上に羅列したものについて、努力して考察するほか、西洋の新聞を広く読み、それを歴史に通じるためのてびきとするのみである。

訳注

(1) 原文は「鏡億兆人操作霊頑之質」。
(2) 原文は「震旦」。以下、「震旦」の語がまれに現れるが、「中国」と訳す。
(3) 原文は「泊入中原、鞭長莫及」。
(4) 繫辞下。
(5) 「三通」は、杜佑『通典』、鄭樵『通志』、馬端臨『文献通考』を指す。
(6) 原文は「溺水求援、衣不待解。落井下石、狼已甘心」。「落井下石」は人が窮地に陥ったのに乗じて、攻撃すること。韓愈「柳子厚墓志銘」に拠る。

(7) 原文は「是奏韶濩於聾俗」。「韶濩」は殷の湯王の音楽を指す。「濩」は民をまもる意。『左伝』襄公二九年に見える。

(8) 『荀子』非相。「後王」は近代の王。

(9) 謝文洊（一六一五―一六八一年）、字は秋水、江西南豊の人、清初の理学家。著に『大学中庸切己録』等。

(10) 原文は「学明理於経、而習事於史。史於学居十之六、而閱歴煅錬、又居其四」。謝文洊『左伝済変録』自序に見える。同序にはこの一節に続けて、「事変無窮、莫可究詰。然能挙古人之成案、精思而力辨之、置身当日、如親受其任、而激撓衝突於其間。如是者久之、則閱歴煅煉、已兼具於読史之中」と見え、「閱歴煅煉」が史書を通じて古人の例を追体験することと窺える。いま賀長齢輯『皇朝経世文編』巻五、学術五。

(11) 原文は「是故不通中史、不知秦漢以来之政治学術、或為真源、或為孽派、経数千百変而靡所底、而制度典章文物之顕易其程者、尚不在此例」。唐才常は、秦漢以来、経書の意味が乱され、むしろ西洋の方が三代の法にかなっていたと考えていた。例えば、「自邃古至唐虞、世局一変、自唐虞至秦漢、世局一変、自秦漢至今、世局又一大変」、「秦漢変乱経法、中国遂恒有財匱之虞。泰西未染中土習気、所行適与古会。又商有税而田無賦、得天地酌盈剤虚〔みちているところから足りないところに調整する〕之理。迂儒不通古今、別然否、惟以西学相觝排、而不知吾中国多秦漢相承之窳政、而堯、舜、禹、湯、文、武、周、孔之所存者幾希。若之何不窮且尽也」参照。「歴代商政与欧洲各国同異考」（『唐才常集』）、三三三―三三八頁。

(12) イギリスの哲学者ロジャー・ベーコン（Roger Bacon、一二一二―一二九二年頃）を指すか。一二七八年、彼はいかがわしい新説を提示したという理由で修道院に監禁された。

(13) 原文は「頗於中国永和遺風為近」。

(14) 原文は「窃惑乎日変皇王之精意者、猶磎然以不変為詞」。

(15) 耶律徳光（九〇二―九四七年）、契丹（遼）の第二代皇帝。『資治通鑑』巻二八六、後漢紀一に「契丹主広受四方貢献、大縱酒作楽、毎謂晋臣曰、「中国事、我皆知之。吾国事、汝曹弗知也」と見える。同じ頃、梁啓超もこの耶律徳光の言を引き、「以区区之遼、猶且持此道以亡中国、況声明文物、典章制度、遠出於遼人万万者乎」と述べている。「論学校七（変法通議三之七 訳書）」（『時務報』二七冊、一八九七年）。また、黄遵憲もつとに「昔契丹主有言、「我於宋国之事纖悉皆知、而宋人視我国事如隔十重雲霧」。以余観日本士夫、類能読中国之書、考中国之事。而中国士夫好談古義、足己自封、於外事不屑措意」云々と述べている。黄遵憲『日本国志』（一八九〇年）、自叙。

(16) 章学誠がその主著『文史通義』で主唱した「六経皆史」説は、清末に経書の義が次第に否定され、事を記した史とされていくなかで、注目された。今文派と六経皆史説は、最終的には相容れなかったものの、心情においては通じるものがあり、今文派は聖人や経書の義を形式的には至上のものとしながら、実際には聖人、経書と無関係な己れの、今の義を主張し、儒教の極限状況を呈した。井上進『明清学術変遷史―出版と伝統学術の臨界点―』（平凡社、二〇一一年）、三八五―四三〇頁参照。

(17) 『漢書』芸文志に「古之王者世有史官、君挙必書、所以慎言行、昭法式也。左史記言、右史記事、事為『春秋』、言為『尚書』、帝王靡不同之」と見える。

(18) 『漢書』芸文志に「書曰『詩言志、哥詠言』。〔中略〕故古有采詩之官、王者所以観風俗、知得失、自考正也」と見える。

(19) 原文は「『礼』、『楽』史氏之制度」。

(20) 何休『春秋公羊経伝解詁』隱公七年および同一一年に「『春秋』変周之文、従殷之質」と見える。

(21)『孟子』離婁下に「孟子曰、「王者之迹熄而『詩』亡、『詩』亡然後『春秋』作。晋之『乗』、楚之『檮杌』、魯之『春秋』、一也。其事則斉桓晋文、其文則史。孔子曰「其義則丘窃取之矣」」」と見える。原文の「楚書」は『檮杌』のこと。

(22) 荀悦（一四八―二〇九年）、『漢紀』を著す。袁宏（三二八―三七六年）、『後漢紀』を著す。

(23)『漢書』芸文志に史部は見えず、『隋書』経籍志に至って四部分類が現れ、史部は「正史」以下一三種に分類された。この一三種中に「刑法篇」、「譜系篇」が見える。また、子部の「儒者」以下一四種中に「兵者」が見える。

(24)『四庫全書』では史部が「正史」以下一五類に分けられ、その一つに「詔令奏議」が見える。

(25)『周官』は『周礼』のこと。「六典」は六つの治国の法。『周礼』天官に見える。

(26) 原文は「宋代誅心之余論」。「誅心之論」は、晋の趙盾が君を弑した乱臣を討たなかったことに対し、史官が「趙盾君を弑す」と記した論法を指す。心の不純を責めるもの。『左伝』宣公二年に見える。

(27) 原文は「明人評尾之陋習」。「評尾」は「批尾」のことか。「批尾」は他人の著作の末尾に批評を加えること。黄宗羲「天岳禅師詩集序」に「不知先賢之学、如百川灌海、以異而同、而依傍集注、妄生議論、認場屋為両廡、年来遂有批尾之学」と見える。

(28) 原文は「斯又毎下愈況者」。「毎下愈況」は状況がますます悪くなること。本来は「毎況愈下」。

(29) 蔣良騏撰、三二巻、一七六五年。清朝の編年体の歴史書。国初から雍正年間までを記す。また王先謙撰、一九五巻、一八八四年。『東華録』を補筆する。国初から道光年間（のちに同治年間）までを記す。

(30)『東華続録咸豊朝』、潘頤福撰、六九巻、一八九二年。また『東華続録光緒朝』、朱寿朋撰、二二〇巻、一九〇九年。

(31) 魏源（字は默深）撰、一四巻、一八四二年（のち一八四四、四六年に重訂）。兵事を中心として国初からアヘン戦争までの歴史を記す。

(32) 黄遵憲撰、四〇巻首一巻、（広州）羊城富文斎、一八九〇年等。黄遵憲が日本公使の参賛（書記）として来日して以来、二〇〇余種の書を採り、八、九年の歳月をへて成書。「国統志」以下一二類に分けて日本を紹介する。

(33) 王韜撰、二四巻、淞隠廬、重訂本、一八九〇年等。以下、西学書の書誌について、張暁編著『近代漢訳西学書目提要―明末至一九一九―』（北京大学出版社、二〇一二年）、熊月之主編『晩清新学書目提要』（上海書店出版社、二〇〇七年）に拠る。

(34) 托馬斯・米爾納（英、Thomas Milner）著、慕維廉（英、William Muirhead）訳、蔣敦復潤色、八巻、（松江）墨海書院、一八五六年等。イギリスの開国からビクトリア朝までの歴史を記す他、職政志略、刑法志略、教会志略等から成る。

(35) 闕斐迪（英、Frederic Galpin）訳、徐景羅重訳、四巻、出版者不詳、石印本、一八八六年等。ロシアの八六〇年から一八五六年までの歴史を記す。

(36) 格堅勃斯（米、G. P. Quackenbos）著、岡千仞・河野道之編訳、四巻、湖南新学書局、一八九六年等。アメリカのコロンブスによる発見から第一五代大統領ジェームズ・ブキャナンまでの歴史を記す。

(37) 沈敦和輯訳、四巻、金陵刻本、一八九六年等。四国の歴史沿革、国土、政治、財賦、文学、武備、教育等について記す。

(38) 岡本監輔著、二〇巻、（上海）申報館、一八七九年等。彼徳

巴利（米）著『万国史略』、魏源『海国図志』等から編訳。世界各国の地理、政権、政体、官制等について記す。

(39) 赫徳（英、Robert Hart）輯、艾約瑟（英、Joseph Edkins）訳、一三巻、税務司総署、一八八六年等。欧州諸族、ギリシャ・ローマの盛衰、諸国の始まり等からドイツの統一までを記す。

(40) 艾約瑟訳、七巻、（上海）著易堂、一八九六年等。ギリシャの始まりからローマの属州になるまでを記す。

(41) 著者不詳、艾約瑟訳、一三巻、税務司本、一八八六年等。巻一ローマの古代都市、巻二ローマによるイタリアの獲得、巻三ローマとカルタゴの戦い等から成る。

(42) 博那（英、Henry George Bohn）著、林楽知（米、Young J. Allen）・厳良勲訳、李鳳苞彙編、四巻、（上海）制造局、一八七四年等。表の形式で、各国の帝王の沿革を中心に、アジア、ヨーロッパ、アフリカ、アメリカの三〇余国の種族、政教、戦事、学術、政治等について記す。前二三四九年から一八六一年までを対象。

(43) 張宗良口訳、王韜輯著、二〇巻、弢園王氏、一八八六年等。一八七〇年に起こった普仏戦争について記す。

(44) 『欧州東方交渉記』、麦高爾（英、英文氏名不詳）輯、林楽知訳、瞿昂来訳、一二巻、（上海）製造局、一八八〇年序等。クリミア戦争（一八五三―一八五六年）から一八七八年のベルリン会議までのヨーロッパとオスマン帝国の交渉史を記す。

(45) 麦丁富得力（英、Frederick Martin）編、林楽知訳、鄭昌棪筆述、一二巻首一巻、（上海）製造局、一八七五、一八七八年等。各国の国土、人口、官制、教育、財政、商務等について記す。

(46) 馬懇西（英、Robert Mackhenzie）著、李提摩太訳、蔡爾康筆述、二四巻、（上海）広学会、一八九五年等。一九世紀欧米各国の改革や弊政の除去、政体の変化、人口、物産、経済、科学文化、人物、風俗等について記す。

(47) 原文は「今襲西学之皮毛」。軍事や言語などを指すか。

(48) 「素王」は孔子を指す。孔子が布衣の身でありながら『春秋』を製作し、古に託して改制を行った王者であったとする。この「素王改制」説は、康有為『孔子改制考』（一八九八年）でよく知られるが、唐才常は一八九八年に師である欧陽中鵠に送った書簡で、「受業於素王改制、講之有年、初非附会康門。去年辦『湘学報』、即極力昌明此指（中略）。今年三月、始読所謂『改制考』、『董氏学』両書。其宗旨微有不合処、初不敢苟同」と述べており、必ずしも最初から康有為の影響を受けたわけではないようである。前掲「上欧陽中鵠書（九）」、五三二頁。また唐才常は、同年、別の論文で「『春秋』為素王改制之書、上本天道、中用王法、下理人情、治通三統、礼存四代。今環球各国、散無友紀。（中略）余謂能本『春秋』之意、治公法之学、必有視恵頓諸人更精者、孔教真派、庶幾顕明於世。何則。素王改制垂世之公心、経権互用、不以古今中外而有閡也」とも述べており、『春秋』の意にもとづいて「公法」を治めれば、ホイートン（恵頓）『万国公法』よりよいものとなるとして、古今中西が通じ合うことを目指していた。前掲「交渉甄微」、七三―七四頁。

(49) 『新唐書』魏徴伝に「以古為鑑、可知興替」と見える。

(50) 『礼記』曲礼上に「史載筆、士載言」と見える。この句の鄭玄注には「筆、謂書具之属」と、孔穎達疏には「史、謂国史、書録王事者。王若挙動、史必書之、王若行往、則史載書具而従之也」と見える。

(51) 原文は「小説家出稗官」。『漢書』芸文志に「小説家者流、蓋出於稗官」と見え、この句の如淳注に「王者欲知閭巷風俗、故

立稗官以使称説之」と見える。

(52) 原文は「胥権衡如此、一挙而三善備焉」。『湘学報』では「如此」を「于此」とする。『礼記』文王世子に「行一物而三善皆得焉」と見える。

(53) 李鳳苞撰、一巻、江標編『霊鶼閣叢書』第二集、清光緒年間。李鳳苞（一八三四―一八八七年）が署出使徳国大臣としてドイツに滞在中の見聞を記す。記述は光緒四年（一八七八年）一〇月二日から同年一二月二九日まで。

(54) 芍克（Wilhelm Schott、一八〇二―八九年）、ドイツの漢学者。『使徳日記』光緒四年一一月一三日の条に「又謁学士芍克、年已七十六矣。著作等身、兼精東方学問、見其二十年前用徳文所撰中国文法、中国古語考等書、久有印本。又通清語、蒙古語、手為編纂者数十冊、出三合便覧、清文彙見示、多旁行小註、手訂歧誤。今雖衰邁、而方将契丹国志訳作徳文、已脱稿二巻、且云擬訳遼金元三史、真不知老至矣。苞贈以瀛寰志略、開巻数行、即摘出錯誤数処」と見える。

(55) 愛爾勃については、『使徳日記』光緒四年一〇月二七日の条に「太姆士主筆道克得愛孛爾（タイムズ）（ママ）」と見える。その娘については、同年一二月二五日の条に「拝客並往愛爾孛（ママ）家、投刺謝宴。〔中略〕是日愛君延入、並令其次女出見、才十三齢、通六国語、談中亜細亜事甚詳悉、指陳各国形勢、瞭如指掌。〔中略〕以垂髫之女子、而淹博如此、蓋得益於庭訓者多矣」と見える。

(56) 『重訂法国志略』（一八九〇年）凡例に、「余撰法国志略、取資於日本岡千仞之法蘭西志、岡本監輔之万国史記」と見える。岡千仞（一八三三―一九一四年）、号は鹿門、仙台出身の漢学者。岡本監輔（一八三九―一九〇四年）、号は韋庵、阿波出身の探検家、教育者。

(57) 重野安繹（一八二七―一九一〇年）、漢学者、歴史学者。

(58) 萩原裕（一八二九―一八九八年）、今治出身の漢学者。

(59) 河野通之（一八四二―一九一六年）、仙台出身の漢学者。

(60) 木原元礼（一八二四―一八八三年）、号は老谷、土浦出身の漢学者。

(61) 原文は「抱兎園冊子」。『兎園冊』は唐代の杜嗣先が太宗の子のために編纂し、経典をやさしく説いたもの。五代まで私塾でよく教科書として用いられた。『新五代史』劉岳伝に「兎園冊者、郷校俚儒教田夫牧子之所誦也」と見える。

(62) 『綱鑑易知録』、呉乗権等撰、九二巻、康熙五〇年（一七一一年）序刊。朱熹『資治通鑑綱目』の体例に倣って、太古から明末までの歴史を記す。「三皇紀」から「明紀」までの二七紀から成る。また、通俗史書として明末に横行し、以後歴史教科書として広く読まれた「綱鑑」については、中砂明徳『中国近世の福建人―士大夫と出版人―』（名古屋大学出版会、二〇一二年）、第五章「『通鑑』のインブリード――「綱鑑」」参照。

(63) 『歴史綱鑑補』、袁黄輯、三九巻首一巻、万暦三八年（一六〇六年）序。同様に朱熹『資治通鑑綱目』の体例に倣って、太古から元末までの歴史を記す。「三皇紀」から「元紀」までの二五紀から成る。袁黄（一五三三―一六〇六年）は、号が了凡、著に『陰騭録』等。

(64) 胡致堂（一〇九八―一一五六年）、名が寅、著に『読史管見』等。

(65) 邱瓊山または丘瓊山（一四二一―一四九五年）、名が濬、著に『世史正綱』、『大学衍義補』等。

(66) 林西仲、名が雲銘か。林雲銘（生没年不詳）、字が西仲、順治一五年（一六五八年）の進士、著に『挹奎楼文集』等。

(67) 原文は「足以範億劫恒河沙世界」。「恒河沙」は、数が無限に多いことのたとえ。

(68) 以上、『資治通鑑』について、『四庫全書総目』巻四七の同書

解題に同様の記述が見える。

(69) 注（5）参照。

(70) 袁枢撰。袁枢（一一三一―一二〇五年）、字が機仲、紀事本末体を創始した。

(71) 陳邦瞻撰『宋史紀事本末』、同撰『元史紀事本末』、谷応泰撰『明史紀事本末』を指す。

(72)「紀伝」の誤りか。注（73）参照。

(73)『四庫全書総目』巻四九「通鑑紀事本末」に、「案〔中略〕自漢以来、不過紀伝編年両法、乗除互用。然紀伝之法、或一事而複見数篇、賓主莫辨。編年之法、或一事而隔越数巻、首尾難稽。枢乃自出新意、因司馬光資治通鑑、区別門目、以類排纂、毎事各詳起訖。〔中略〕包括数千年事蹟、経緯明晰、節目詳具、前後始末、一覧了然、遂使紀伝編年貫通為一、実前古之所未見也」と見える。

二、日本人が真心から中国を保全しようとしていることを論ず[1]

日清戦争以来、時局は急を告げ、西洋の勢力が次第に東洋へと及び、その勢いは燎原の火のようである。暗愚の極みで、中国と外国の情勢に暗いものでなければ、速やかに日中が連携すべきことを唱えないものはいない。とはいえ、日中が連携すべきことは誰でも知っていても、付和雷同して他人の口まねをしているばかりで、最終的に目指すところが定まらず、ただ傍観して慌てているだけで、ますます疑いがつのっている。ひそかに恐れるのは、この状態が長く続いて、その熱意が失われてしまい、昔の状態が再びきざしてくれば、これによってアジア情勢が弛緩し、あらゆることがますますなしえなくなってしまうことである。ゆえに私は日本人が熱心に中国を保全しようとしていて、英米各国が下心を抱いているのとは異なっていることをはっきりと述べ、これによって中国人の惑いを払うこととしたい。

今中国を保全しようとするならば、人材を育成することが第一であり、人材を育成しようとするならば、西洋文明の政治・学問を取り入れ、これを日び中国人の脳裏に注ぎ入れ、これによって飛躍的進歩を目指す志を啓発することが、貴重な人材獲得の近道である。[2] なぜか。中国人が次第に西洋の学問を知るようになったのは、イギリス人が香港に大学堂を設立してからである。しかし、イギリス人が設立した学堂は、ただ彼らのビジネスの役に立つ人材を育成するためのものに過ぎず、その目的はもとより中国のために配慮されていない。ゆえに彼らが教えるのは言語の読み書き程度の瑣末なものに過ぎず、政治・学問のような大事についてはいまだ聞いたことがない。その他の宣教師が設立した学堂も、上海や鎮

江、武漢などいたるところにたくさんあるが、彼らのいわゆる西学は、天主かイエスの経典をうんうん唸るばかりで、いわゆる中学をまじえるというのも、軽薄卑俗な八股文の参考書[3]程度のことに過ぎない。その意図もだんだんと人々の宗教を憎む心をやわらげ、互いに平穏無事に過ごすことだけである。聡明で屈強な子弟や名門の家柄のもので、彼らの仲間になろうと願う者はもとより滅多にいない。〔したがって〕これによって人材を育成しようと望むのは、ほとんど砂を蒸して飯にしたり、木に縁りて魚を求めるようなものである。そもそも学問をなす上で尊ばれるのは、政治、法律、倫理、科学[4]であり、これによって上を安定し、下を保全し、隣国と交わり、人民を治めるための備えとするのである。もしヨーロッパ人の仲介人である宣教師[5]が国中に遍き、信徒とともに思う存分その教えを中国の一八省に宣伝し、中国人に決して西学とは何かを知らせずに、なお誇らしげに世界に向かって、われわれは中国のために風気を開き、文明を推進した、と叫んでいるのは、三尺の子どもを騙そうと思ってもそれは難しい。ましてやどうして有識者の一睨にたえられようか。大日本志士が中国に贈ろうとしているものは、政治学、経済学、哲学、社会学が専らであり、しかも中国二千余年の教えに毫も妨げとならず、末節を捨て、根本を求め、短所を捨て、長所を取っている。これこそが天が将来両国合邦の局面を成すゆえんであり、ヨーロッパの勢力の東漸をふさぐ一つの大きなかなめである。

ある人が言うことには、最近、中国人がだんだんと外国のことを知るようになったのは、広学会[6]が翻訳した書物が実にそのカギを握っているのであり、どうしてイギリス人が新学に何の功績もなかったといえようか、と。これにこたえて言うには、それは確かにそうである、と。しかし、私が見るところ、中国人の大病は、科挙によって得られる名誉と利益に心を惑わしてばかりで、一つ二つの時務に関わる表面的な言葉を引き写してきては、科挙で名声を得るためのステップとしてしまっていることにある。広学会はこれに乗じて退廃的な風潮を広め、一儲けしようとする愚民はそれが醜く卑しいことであるのを忘れてしまっている。例えば、『中日戦紀本末』中の「広学会記」に「時務試験予想秘伝書の提要を附す」云々と注記されているのは[7]、これら広学会の書物がいずれも科挙試験の答えを予想するためにこしらえられたものだからである。その「泰西新史攬要提要」（『中日戦紀』に見える）には、「およそこの書を熟読したものは、時務試験の論

文を作成し、典故の引用、運用を行う際、正確かつ根拠を示すことができる」という。[8] ああ、その卑しく瑣末な見方は、書物の端々に表れ、その意図を探ると本当に嘖飯ものである。もしただ中国人に西学の表面的な知識ばかりを追い求めさせ、科挙試験場の筆写係にするだけであれば、[9] どうして〔西学書は〕書坊の『経籍備纂』[10]、『策学大成』[11]、『事類統編』[12]、『四書典林』[13]と異なるであろうか。去年、風気がたまたま開け、『西学通考』[14]、『時務通考』[15]といった種々のでたらめで、一儲けしようとする書籍が天下に溢れたのも怪しむに足りない。そもそも広学会が創設された趣旨からして、その目的が人々に科挙試験対策のための秘伝書を手に入れさせることに過ぎないのであれば、その人材育成の結果はほぼ見当がつく。ましてや、去年、皇上が毅然として変法を行おうとし、各省に大小学堂を設立するよう命じたが、税務司ハート[16]が総理衙門[17]に書簡を送り、努めてこれを妨害しようとしたのであればなおさらである。彼は、中国にはすでに同文館、方言館、水陸師学堂があるのに、なぜさらに次々と設立して、物議を醸そうとするのか、というのであった。[18] これはイギリス人が中国人の民智が大いに開け、それによって中国分割の局面が妨げられるのを欲していないからであり、[19] 自ら腹の底を掲げて天下に示したものに他ならない。この他、ロシア、フランス、ドイツ、アメリカが中国に学堂を設置しようとしているが、その目的もいずれも中国人に彼らの言語に通じさせ、そのもともとの性質を変え、将来彼らのために奔走する人材にしようとしているに過ぎない。明らかで疑いえないのは、ただ日本人が最近設立した学堂だけが、いずれも教育、政治、経済、哲学、社会から始め、はじめて〔学生を〕仲介人の材としてあつかっていない、ということである。各省から派遣された子弟で東京に留学したものは、日本人も彼らと深く交わり、彼らを自立の気風に染まらせ、西洋諸国の奴隷に甘んじる性質を徐々にあらためさせている。このことはまだ始まったばかりで、欧米文明の学術を学びつくすまでは言えないが、基礎がすでに固まれば、発展は際限なく、もとよりかの虎視眈々として、日々ほしいままに陰謀をめぐらしているものと同列に論じられるはずはないのである。

ああ、国が亡ぶゆえんは、人材がいないからであり、人材が失われるゆえんは、学ばないからである。今、日本人は熱心にアジアを保全し、中国国民の精神を喚起しようとしているのに、中国人はなお競って学び、それによって〔日本人と〕手を携えて賢者の仲間に加わろう[20]としないがごときであ

る。それどころか、甚だしくはひそかに憶測をたくましくして、日本人は中国人を誘惑して彼らの徒党にしようとしていると言いあっている。ああ、このような議論が現れるのは、まったく自らの名誉を大切にしないだけでなく、また東アジアの大勢に暗いがためである。またあるものにいたっては、日本人の学術は、彼らが欧米から得たのは一〇分の七、八に過ぎず、たとえこれにつきしたがって追いついたとしても、その方法は迂遠である、という。この言は道理にかなっているようである。とはいえ、欧米の学術はたしかに精緻ではあるものの、〔欧米が〕これを中国に輸出しようとしないのであれば一体どうすればよいのか。そもそも中国の人物は卓越していて、種族の特性は明敏であり、もし日本がすでに得た学術を得て、目前の用に供すれば、世界で向かうところ敵なしである。ましてや、日本から得た学術にますます磨きをかけ、次第に欧米文明の域へと到達すれば、どうして一変して道義が実現した世界に至る時がこないであろうか。[21] 例えば、百里の道がここにあり、日本人はすでに八、九〇里を進んでいる。中国人は途中から日本人に携えられながらともに進めば、分かれ道で道に迷うことを避けられるだけでなく、よく知った道を軽々と進むことで成功も収められる。彼ら白色人種は我われアジア人種が忽然として太平洋に飛躍することを望まないであろうが、どうして学術が間接的に伝わることまでを禁じることができようか。もし私のことが信じられないというのであれば、ひとまず試みに日本人が今ここに立てた中国人を教育するための学制と、英米の宣教師が立てた学制とを、相互に比較参照してみるがよい。どちらが本物でどちらが偽物であるか、どちらが着実でどちらが虚妄であるか。必ずや見分けられる者がいるはずである。[22]

訳注

(1) 原文は「日人実心保華論」。以下、原文では「華」、「中」、「中国」、「支」、「支那」の語が混用されるが、原則として、「中国」と訳す。

(2) 原文は「探驪得珠之霊捷手段」。「探驪得珠」は黒竜の顎の下を探って珠玉を手に入れること。危険を冒して大きな利益を得るたとえ。『荘子』列御寇に見える。

(3) 原文は「房行帖括」。「房行」は「房稿」と「行巻」の並称で、科挙試験の参考書として編まれた八股文の選集のこと。顧炎武『日知録』巻一六、「十八房」に見える。「帖括」は唐代の科挙試験の「明経」科のために作られた教典。明清時代には一般に八股文を指す。

(4) 原文は「政事、律例、倫理、格致」。

(5) 原文は「僕圉駔儈」。「僕圉」は馬を飼う御者。『墨子』天志

下に見える。「駔儈」は仲買人。『漢書』貨殖伝に見える。

(6) 一八七七年に上海に設立されたプロテスタント宣教師を中心とした啓蒙団体。会長は海関総税務司ロバート・ハート（英、Robert Hart、赫德、一八三五―一九一一年）、督弁はアレキサンダー・ウィリアムソン（英、Alexander Williamson、韋廉臣、一八二九―一八九〇年）。機関誌『万国公報』等を発行。

(7) 原文は「『中日戦紀本末』広学会記旁注附考試時務揣摩秘籍紀要云云」。『中日戦紀本末』は『中東戦紀本末』を指す。林楽知訳『文学興国策』（広学会、一八九六年、関西大学蔵）には、「中東戦記初続編総跋」とともに「広学会記」一巻が付録され、その巻題の下に割注で「附考試時務揣摩各新書紀要」と記される。

(8) 原文は「凡熟読是書者、作為時務策論、隷事運典、信而有徴」。同前「広学会記」付録「各新書紀要」中の「泰西新史攬要二十四巻」提要に同じ一節が見える。

(9) 原文は「為場屋鈔胥之用」。

(10) 『策学備纂』を指すか。蔡啓盛・呉頴炎輯、三二巻、（上海）点石斎石印、一八八八年等。

(11) 『策学総纂大成』、蔡寿祺撰、四六巻目録二巻、（北京）出版者不詳、一八八一年等。

(12) 林意誠輯、九三巻、南海林氏味経堂、一八三九年等。

(13) 江永撰、三〇巻、蚌城汪氏耡経斎、一七三五年等。

(14) 胡兆鸞輯、三六巻、湖南刻本、一八九七年。

(15) 杞廬主人輯、三一巻目二巻、（上海）点石斎石印、一八九七年。

(16) 総税務司は中国の海関行政の長官。一八五八年天津条約付属条項により上海に設置。ロバート・ハートが第二代総税務司。

(17) 総理各国事務衙門を指す。一八六〇年天津条約が批准され、外交を管掌する官庁として翌年一月に創設。付属官庁として同文館（外国語等の教育機関）、総税務司がある。

(18) 出典不詳。『湘報』、『知新報』には見当たらない。

(19) 原文は「以礙其瓜分之局」。

(20) 原文は「以成把臂入林之雅」。竹林の七賢の故事をふまえている。

(21) 原文は「安見無一変至道之期也」。『論語』雍也に「斉一変、至於魯。魯一変、至於道」と見える。

(22) 例えば、『亜東時報』六号（一八九九年）に掲載された「開設東亜学堂啓」には、杭州の本願寺公館内に設立された東亜学堂の規則として、「第一条　本学堂為中国培植人材起見、亟求速成、故択学科之緊要者、先授焉」、「第二条　本学堂志在陶淑英俊、以興中国、故不取修羊、以敦睦誼焉」等と見える。

（つちや　ひろし　名古屋大学大学院人文学研究科准教授
おう　てんきょう　同大学同研究科博士後期課程学生
こう　じゃくえん　同右
かしま　りな　同大学同研究科博士前期課程学生
はん　ようは　同右
ふ　うどう　同右
きし　ふみな　同大学文学部学生）